

夢の氾濫―三島由紀夫「孔雀」論―

小 埜 裕 二*

(平成二十年九月三十日受付)

(平成二十年十一月十二日受理)

要 旨

本稿では、まず富岡の現在の「無為で退屈な人生」のありようを見さだめたうえで、作品の結末部で富岡少年が現れる超現実的場面の意味について考察した。その後、「孔雀」において語られない過去と語られない未来の意味について言及した。「孔雀」における無為な富岡の人生は、意識下に抑えこんだ美への憧れをひそかに保ち続けた結果であるが、本作では意識下に抑えこんだ夢想世界がその閾を越えて現実世界にあふれだすところまで描かれている。その意味するところは大きい。虚構世界と現実世界との間の壁が無くなり、虚構世界が現実世界のものとなることを「孔雀」の結末は暗示していた。退屈で無為な生を拒否しようとする三島の思いが「孔雀」の夢の氾濫につながっていく経緯について論じた。

KEY WORDS

美 beauty 夢想世界 dream world 孔雀 Peacock

一、語られないもの

三島由紀夫の短編小説「孔雀」は「文学界」昭和四〇年二月号に発表され、のちに単行本『三熊野詣』(新潮社 昭和四〇年七月)に収められた。『三熊野詣』に収録された四編の小説(「孔雀」「三熊野詣」「月膽莊奇譚」「朝の純愛」)について、三島は次のように述べている¹⁾。

今度の四篇をまとめたのは、ほぼ同時期に書かれ、共通のテーマを持つてあるからである。この集は、私の今までの全作品のうちで、もつとも頹廢的なものであらう。私は自分の疲労と、無力感と、酸^すえ腐れた心情のデカダースと、そのすべてをこの四篇にこめた。四篇とも、いづれも過去と現在が対立せしめられてをり、過去は輝き、現在は死灰に化してゐる。「希望は過去にしかない」のである。

なるほど四編の主題は「いづれも過去と現在が対立せしめられてをり、過去

は輝き、現在は死灰に化してゐる」といった作品である。「孔雀」は美少年であった過去の富岡とその面影を失った現在の富岡が対比されているし、「三熊野詣」(新潮)昭和四〇年一月)はありもしなかった過去の物語を、主人公の伝説として現在に流布させ、それによって現在を覆いつくそうとする物語である。「月膽莊奇譚」(「文芸春秋」昭和四〇年一月)は見ることしかせず、行為を別の人物に代行させてきた男に死が与えられる。「朝の純愛」(「日本」昭和四〇年六月)は過去にあった自分たち夫婦の美と愛を取り戻すために、若者を利用して現在の生の充実を図ろうとするが、利用した若者に刺殺される物語である。

『豊饒の海』(新潮)昭和四〇年九月〜四六年一月)が書かれはじめるのはこの作品集刊行前後である。右のようなデカダースな思ひは『三熊野詣』が書かれたことで清算されたのか。作品集『三熊野詣』が過去の自分と現在の自分の乖離をいかに調整するかといった問題を問うているとしたら、また高度経済成長期の精神的混乱の行方が問われているとしたら、またさらに三島自身が

* 人文・社会教育学系

三十代から四十代へと年齢を重ねていくことの若さの喪失の問題が問われているとすれば、こうした問題は、引き続き伏流となつて『豊饒の海』に流れつづけたと考えるべきであろう。

『豊饒の海』において本多の前に現れる転生者の姿は、『三熊野詣』に所収された「孔雀」の、富岡の前に現れる富岡少年の姿に重なる。その意味で「孔雀」は『豊饒の海』を考える重要なスケールとなる。さらに『豊饒の海』第三巻『暁の寺』擱筆後に書かれた、三島の周知の発言を視野にいれると、「孔雀」結末との関連性に気づかされる。『暁の寺』の結末は、予期された流れを三島が別の方向へ向けようとしたが、書かれた結末は期待を裏切つたようである。「孔雀」の結末も三島にとっては不可避的といえる、書くことの論理的帰結、あるいは動かしがたい三島の生の軌跡の帰結であつたのではない。

作品集『三熊野詣』のなかでは、三島は「孔雀」を一番好んだ。単行本あとがきで三島は次のように書いている。

これら四編（『三熊野詣』所収四作品—小笠注）のなかで、私がつとも愛するのは「孔雀」である。美の殺戮者としての美少年の永生。ここには私について離れぬ一個の固定観念があると云つてよいだらう。つまり孔雀の美はその少年自身の属性なのであり、少年は不断にその属性を殺さねばならぬ。それはドリアン・グレイとは反対だ。つまりあのワイルドの小説では、美少年ドリアンは青春を保持するために、画像のほうが彼の罪の醜さと衰滅とを引受けるのだが、「孔雀」では、つまらぬ一人の男の無為で退屈な人生を永らえさせるために、彼の幻影の美少年が不断の殺戮を繰り返してゐるのである。

この一節は「孔雀」の特質を考えるうえで大事なヒントとなる。美少年の永生のためには、不断に孔雀を殺さなければならない。なぜなら孔雀の美は美少年自身の属性であるからだ。少年自身の属性である孔雀の美を殺すことが、美少年の永生につながるという説明は、にわかには受け止めがたいが、うつろいやすい美の性質、とりわけ生きてゐるものが成長の過程で美を不可避的に失つていくことを考えた場合、孔雀の美を美少年自身の手で不断に滅ぼし続けることでしか自身の美を永遠のものにできないということは理解できる。こうした「固定観念」は、三島が十代の終わりに書いた「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」（『文芸文化』昭和一八年二月）において示されたものでもあつた。

M遊園地の孔雀が殺されたことを耳にしたとき、富岡は「孔雀の本質を開顕した事件」に嫉妬を覚える。だが、その孔雀殺しの犯人が、富岡少年であつたことが結末で示されることで、富岡自身が三島の言う「私について離れぬ一個の固定観念」を生きていたことを読者は知らされる。富岡の内なる美少年は、夢の中で孔雀を殺戮することを繰り返すことで永生を手に入れていた。金閣寺を焼くことで内なる金閣寺を焼きはらい、あらたな人生を歩みだそうとした「金閣寺」（『新潮』昭和三十一年一月一〇月）の溝口の歩みとは逆の道である。なぜなら富岡は決して新たな人生を歩みだしはしないからだ。

「つまらぬ一人の男の無為で退屈な人生」とは、富岡自身も知らないところで、内なる美少年を生かすために、内なる孔雀を殺し続けてきた結果、引き受けねばならなかつた人生であつた。富岡は、彼も気づかないところで、いまだ美少年の美にこだわっていた。だからこそ「無為で退屈な人生」を送ることになつたのである。ところで富岡同様、どこかで内なる美少年の永生にこだわり続けるなら、三島自身の生も富岡のように老いていくしかない。「美の殺戮者としての美少年の永生」という「固定観念」は、必ずしも三島自身の少年時代が美少年であることを意味しない。少年の夢想は、おのれを美少年と思ひ描くことも暴君と思ひ描くことも自由である。至高の美をつくり出す行為者としておのれを思い描く夢想は、富岡同様の老いをもたらず。

さらに美少年の永生にこだわり続けると老いていくという論理は、小説を書くことで、もう一つの生を生きる作家の現実と一致する。富岡の「荒廃」は、『瀨王のテラス』（『海』昭和四四年七月）で言われた芸術家が芸術作品に自分自身を移譲し滅んでいく姿と同じものである。美の完成を願ひ、美の完成者であるうとすることは、また小説家であるうとすることは、生活者としての歩みを止めることである。それに専心した『サド侯爵夫人』（『文芸』昭和四〇年一月）のサドは、現実に見向きもしないで太り続けた。それが芸術家の宿命である。

〈夢想〉にまつわる悲劇、〈書く〉ことにまつわる悲劇が、富岡の生の隠喩となつてゐる。その悲劇は、富岡の現在を「つまらぬ一人の男の無為で退屈な人生」と捉えるほどに、戯画化されてゐる。三島にはトーマス・マンが目指した芸術と実生活を区別して生きる生き方の指針も二十代のときからあつたが、こうした区別も右の悲劇をおのれの運命として予感したからこそ予防線として張られたものであつたのかもしれない。富岡の年齢は「四十四五歳」に設定されている。「無為で退屈な人生」を過ごす富岡の現在は、執筆当時四〇歳であつた三島の近未来の十分予想されるカリカチュアであつた。

本研究では、まず富岡の現在の「無為で退屈な人生」のありようを見さだめ

たうえで、作品の結末部で富岡少年が現れる超現実的場面の意味について考察する。その後、「孔雀」において語られない過去と語られない未来の意味について言及する。無為な富岡の人生は、意識下に抑えこんだ美への憧れをひそかに保ち続けた結果であると三島は語ると同時に、意識下に抑えこんだ夢想世界がその閾を越えて現実世界にあふれだすところまで三島は描いた。その意味するところは大きい。

本テキストは回想される具体的な物語内容をもたない。富岡の過去の具体的なありようは語られないまま、過去と現在が対照される。富岡は過去と断絶した得体の知れない現在を生きているばかりである。因果関係で結び合わせることもできない過去と現在のあいだの闇を見透かそうとする努力は「孔雀」では放棄されている。また本作では結末に姿を現す美少年の姿をテキスト結末で見るのは刑事の方であり、その後には双眼鏡を手わたされた富岡が若き日の自分の姿を目の当たりにしてどのような気持ちを抱いたか、いかなる態度をとったのか、またその後どのような態度をとるのかについても語られない。

富岡の過去と現在、現在と未来をつなぐものを描きえなかったところに、三島の言う「自分の疲労と、無力感と、酸え腐れた心情のデカダンス」の原因があったように思われる。

二、無為で退屈な人生

一〇月二日未明にM遊園地の印度孔雀二七羽が惨殺された。孔雀好きで、事件前日にもその遊園地で孔雀を飽かず眺めていた富岡に嫌疑がかけられ、刑事が富岡家を訪問した。富岡家の陰気な応接間で刑事は、孔雀に関する飾り物や、雑然として統一のないその他の飾り物の間にある美青年の写真を見出す。後にその美青年の写真が富岡自身であることを聞かされ、刑事は職業的判断を狂わせた富岡の美の欠落に驚愕する。刑事が帰ったあと富岡は孔雀の美と死の関係について考える。十八日にも孔雀二十三羽が殺された。刑事は富岡家を再び訪れ、その事件が犬の仕業であったことを告げる。それを聞いた富岡は、信用せず、囮操作に随行する。夜、犬をつれてやってきたのは、美少年の富岡であった。

富岡に焦点化した語り手は「高い教養」を持つ富岡に、孔雀の美と滅びについての思考を開陳させるが、過去に対する思いや、美を失った理由についての思念を富岡自身に語らせはしない。語り手は三人称に置かれ、富岡にも刑事にも自在に焦点化するが、語り手は富岡の思考から大事なことを取り上げてしまっ

た。富岡の過去は伏せられ、そのことを読者は推測するしかない。

「俺の美は、何といふひつそりとした速度で、何といふ不気味なろさで、俺の指の間から沁り落ちてしまったことだらう。俺は一体何の罪を犯してかうなつたのか。自分も知らない罪といふものがあるだらうか。たとへば、さめると同時に忘れられる、夢のなかの罪のほかに。」

「俺は一体何の罪を犯してかうなつたのか」と富岡が心のなかで思っている以上、この時点で彼がおのれの美の喪失の理由について確かな認識を持っていなかったと考えるべきであろう。富岡は孔雀の美と滅びについての高度な思考を巡らす一方で、自己の老いの理由を考えないことはテキストのギャップとして興味深い。この認識が富岡自身によって改められるのは、テキスト結末部で、孔雀殺しにもむく富岡自身の若き日の姿を見ることがよってであろう。「夢のなかの罪」の内実が、結末において現実世界に裏返しにされて姿を現すことで、罪の所在を知る可能性を得る。富岡は意識せざる意識家として造型され、結末においてはじめて富岡は美を失った本当の理由を知るにいたる。

現在の富岡の無為で退屈な人生からすると、富岡は美の喪失の引き金となった夢想世界を積極的に生きてはいない。「永いこと放置されて埃をかぶつた箱庭みたいな趣」「埃だらけの家、傾いた赤い橋、小さい石燈籠、家の中まですつかり埃の積つた陶器の田舎屋」、富岡の目鼻立ちにはさういふ整ひ方がある」と形容される富岡の様子からも、富岡の過去が放置され、埃をかぶっていることを想像させる。富岡は夢想世界を積極的に生きていないばかりか、若き日の写真を直視しえないことを除いて、失われた美に深く執着してもしないようである。過去において憧れたもの、失われたものは、今では遠く位置する過去のものとなっている。

しかしまた富岡は過去を清算し、別人となって生きていくのでもない。夢想世界を手放したなら、手心えのある現実が待っているはずだが、富岡の現在はそうではない。四歳の子供がいるが、その子供が登場し、子供とともに富岡が遊ぶいきいきとした場面は語られない。富岡の現実世界は不透明なままである。過去は整理されないまま放置され、現実と切り離されている。過去の自分に對する執着や反省が富岡の現在を生んでいるわけでも、現代社会への批判が彼の現在を生んでいるわけでもない。富岡の現在はまさしく「つまらぬ一人の男の無為で退屈な人生」である。

だが今も孔雀の美に惹かれているように、富岡は憧憬の世界を心の内のどこ

かに潜めていた。富岡はかつて美少年であった自分にどこかでこだわり、自分の中に巣くう美への思いの根を止めることが出来なかった。富岡が若返るには、内なる美少年の幻影を殺せばよかった。『金閣寺』の溝口が金閣を焼いたように。だが異形のものとなっても富岡はおのれの内なる美少年を捨ててやることはなかった。内なる美少年を殺す力がなかったからではなく、内なる美少年を殺したら生きることができなかったからであろう。

孔雀は金閣同様、存在自体のなかに闇と共存をはかる何かを持っていた。「孔雀の本質」は、闇のなかに宿る。このことは「孔雀」において明確に語られている。

富岡はこの虚しい小舎を充たす闇のなかに、なほ死んだ孔雀どもの光彩がありありと残つてゐるのを感じた。それはただの闇ではなかった。闇に落ちてゐる形見の一枚の羽根毛ですら、緑、藍、萌黄などの絢爛とした色彩を保つてゐるのなら、この闇自体が、なほ隅々までも、それらの色彩の記憶にひしめき、いはば闇の微粒子の一粒一粒に、孔雀の輝きを宿してゐる筈だった。

創造の倦怠のはてに、目的もあり効用もある生物の種々さまざまな発明のはてに、孔雀はおそらく、一個のもつとも無益な観念が形をとつてあらはれたものにちがひない。そのやうな豪奢は、多分創造の最後の日、空いつぱいの多彩な夕映えの中で創り出され、虚無に耐へ、来るべき闇に耐へるために、闇の無意味をあらかじめ色彩と光輝に翻訳して鏤ておいたものなのだ。だから孔雀の輝く羽根の紋様の一つ一つは、夜の濃い闇を構成する諸要素と厳密に照合してゐる筈だ。

殺されることが自然の摂理になつていると見なされる孔雀は、殺されるところで美を完成させた。孔雀は、その存在形態のなかに闇や死と共存をはかる何かを持っていた。「孔雀の本質」は、闇や死のなかに宿る。だからこそ富岡の中に孔雀は生き続けた。

孔雀は殺されることによつてしか完成されぬ。(中略)その豪奢はその殺戮の一点にむかつて、弓のやうに引きしぼられて、孔雀の生涯を支へてゐる。そこで孔雀殺しは、人間の企てるあらゆる犯罪のうち、もつとも自然の意図を扶けるものになるだらう。それは引き裂くことではなくて、むしろ美と滅びとを肉感的に結び合はせることになるだらう。さう思ふとき、富岡はすで

に、自分が夢の中で犯したかもしれない犯罪を是認してゐた。

孔雀が殺される事件がなければ、富岡は「無為で退屈な人生」のまま生を閉じていた。孔雀の美を完成させたものは誰なのか。それを行った者に嫉妬の思いを抱く富岡の思いが、彼を遊園地の囹圄捜査へとかりたてることになる。

三、夢の氾濫

富岡は、犬をけしかける人間が若き日の自分であることを想像しえただろうか。夢の中の無意識の罪が現実世界を知らずに浸食していたことを想像できたろうか。はたして富岡の目の前に現れるのは、一七歳当時の富岡自身であった。若き日の富岡が、孔雀事件を契機に現実世界にまで侵食してきた。無自覚であった美への囚われが、事件を境に自覚化され、ついに現実世界を凌駕するにいたる。

美少年の形象は、三島が抱いた美に対する憧れの象徴である。かつて少年時代に抱いた夢想世界から、三島は太平洋戦争の敗戦によつて一気に放逐された。昭和二十年代に、三島は作家として華々しい活躍を続けながらも、そのなかでロマン主義的情動をコントロールし、古典主義的な生を身につけるべく努力を重ねた。三十年代に入り、三島はその努力に一応の成功をおさめたかに見えたが、夢の中でそれは生きつづけた。そして再びロマン主義者へと、それも夢の家としてではなく行動するロマン主義者へと回帰していく。

三島は夢想を生きることと小説を書くことの二重の呪縛によつて、おのれの生の現実を蝕まれてきた。ロマン主義者は別の世界を確信をもって生き、芸術家の多くは作品を完成させるために生の現実が希薄になることを甘んじて受け入れるものだが、三島は別の世界を生きることや芸術家の宿命を生きることが拒否した⁴。「憂国」(小説中央公論「昭和三六年一月」)が表していたのは、そうした拒否の意思であった⁵。文学世界の中で夢見られたものを、実際の現実世界のなかへ持ち出すか持ち出さないかのところで、三島文学の緊張は高められていく。三島が説いた文武両道は、武山の世界を描いてもその行為を認識世界から外に出ないようになり通そうとする文学者としての覚悟と、武山の世界を実際に生きる行為者としての覚悟がせめぎ合う生き方であった。

三島は「憂国」を書くことで、武山中尉や麗子とは異なる作家としての、また生身の人間としての実相に遭遇した。「憂国」を書いた三島が物語の外で生きたドラマとは、作り上げた至福の世界に、おのれの生が、武山のような(至

高性」のなかで死なない限り到達しえないという苦しい思いを抱いて生きることであった。三島は「憂国」で〈見る〉ことよりも〈見られる〉側に立つ幸福を語った。三島は、武山のように、死のなかに〈存在の確証〉を得ることに憑かれていく。「悲嘆は痛まない」と麗子が言い、鍵を開放して死んでいったとき、三島は文学の世界から行動の世界に出ていたのかも知れない。閉じられた空間によって象徴的に物語内に閉じ込められていた行為の種々相が、鍵の開放以降、現実世界の中で「苦痛」をたよりに〈存在の確証〉が求められることになった。鍵の開放は、三島の死から眺め返すとき、さわめて象徴的な行為であった。

行為者として現実世界を生きないとすれば、それはいかなる生を迎えることになるかを、つまり「憂国」と反対の道を選ぶならどうなるかということ語ったのが「孔雀」であった。だがさらに三島は、意識下に押し込めてきた夢想世界がその閾を越えて現実世界にあふれだすところまで「孔雀」で描いた。「憂国」の結末で、麗子が自宅の鍵を開け、戸を開けて死んでいったと同じことを、「孔雀」では違うかたちでもっと具体的に描いた。夢想は夢想のままに終わらず、現実世界に現れる。このことは虚構世界で夢見られていたものが現実世界にあふれだすことを意味していたのではないか。夢想と現実との間の壁が、虚構世界と現実世界との間の壁が無くなり、夢想が、そして虚構世界が現実世界のものとなることを「孔雀」の結末は示していた。富岡のような退屈で無為な生を送ることはできない。その思いが「孔雀」の夢の氾濫につながっていた。

『暁の寺』の結末は「一個の固定観念」の勝利を否応なくテキストが宣言したものであった。それは文学世界の中で書かれたものであるが、文学が一つの世界を包含するものである以上、あらかじめ文学世界のなかへ繰り入れられた芸術家の宿命を生きる覚悟と行為者として現実世界を熾烈に生きる覚悟が角逐し、その結果、文学世界が文学者を実際の行為者に変貌させる引金となることもあろう。自身の葛藤を文学世界のなかで真摯に追究し、その結果を生きることもまた文学者の宿命であった。文学者の生とは文学作品の帰結である。しかしその結果を生きたら三島の場合、「憂国」の武山の生を生きる危険な道であった。人生に与えられていたはずの年月が無にされ、人生を輝かせるために死が選ばれる。

無為な人生を送らないためには、無意識のうちにこだわっていた美を葬り去るしかない。『金閣寺』ではそうした主題が展開された。しかし「孔雀」では、そうした主題は展開されない。「固定観念」を生きていた自分を知ったことで、そして虚構世界で夢見ていたものが現実世界にあふれだしたことで、逆にその生き方に殉じる。「固定観念」が決して消えないものであるとすれば、その「固

定観念」を、身をもって生きるしかない。なぜなら、もともとその「固定観念」の実現こそ三島の夢みた幸福であったからだ。

四、語られない過去と未来

孔雀事件は、焼いたはずの金閣が三島の中に甦ったに等しい事件であった。夢の中でひそかに行っていたことが、現実世界に現れた。生活者の歩みを止めた富岡に、過去があふれ、現実が浸食される。それは夢想の勝利だが、そこに三島はかつてのような自己陶醉に近い「陥没」の思いを抱かず、言い知れない不吉を感じたのではないか。かつて「陥没」の感情は文学者として〈見る〉行為の範疇におさまっていた。それは天才の証であった。しかし「憂国」において「悲嘆はいたまない」と悟った麗子の認識は、「苦痛」のなかで生の実感をえようとす。過去の輝きを追憶するのではなく、現在に輝く生を作りだそうとする。とすれば、若き日の富岡が姿をあらわし、孔雀を殺す場面が現実のものとなるのは、再び幻想世界のとりこになった自分の姿を見出すことである以上に、幻想世界が幻想のくびきを越えて、現実世界で苦痛を求めて暴れだすたぐいのものであった。

芸術家には生活者としての実感が無い。それは富岡の生によって明らかである。だが三島は芸術家も美しくありたいと願った。その願いが多年にわたって蓄積した結果、富岡の不毛の生が、幻想世界を現実のものとして生きることとつながられた。結末の富岡少年の出現は現実世界を幻想世界によって塗り替えて生きる三島の予言的行動となった。それは「三熊野詣」の藤宮が現在の世界にほどこした幻想の重ねあわせと同じであった。このことは三島にとって、美の殺戮者として、現実世界で幻想の論理をふりまわすことを意味した。「黒い服」を来て登場する富岡少年は、これまでの服装とは違っている。

富岡には「ラディゲの死」(中央公論「昭和二八年一〇月増」)に示されたラディゲの死をのりこえるコクトオの姿は見られない。富岡の過去から現在へいたる流れは、三島自身の行動の軌跡をたどらない。内なる孔雀をひそかに養いつづけていたことを思い知った三島は、ロマン主義を制御するために積み重ねてきた自身のこれまでの営みに対して空しい思いをいだき、その結果、過去とのつながりは語るに値しないと考えたのだろうか。あるいは「孔雀」の結末は三島が招き寄せたものであるが、結末が意味するものを認めたくない思いが富岡の現在と過去を、三島の現在と過去に結びあわせることをためらわせたのだろうか。

富岡は自分のロマン主義的志向を、彼も知らないところで美少年が孔雀の美を完成させる行為を夢の中でおこなうことによって保持していた。それは孔雀を殺し、孔雀の本質を開顕させる夢想によってであった。そしてそれを内なる夢として夢見続けた富岡は老いていく。老いの原因を結末においてはじめて知る。語り手はもちろん富岡の老いの原因を知っていた。富岡は結末ではじめて語り手の知識に追いつく。そのとき富岡は自分の写真に対峙する。

結末で双眼鏡をのぞき犯人の姿を見たのは富岡ではなく、刑事であった。富岡が若き日の自分の姿を目の当たりにしたとき、彼はどのような思いを抱いたのであろう。そのことを語り手は語らない。富岡のその後を読者の想像にゆだねることが「孔雀」の結末としてふさわしいと考えることもできるが、しかし三島はこの結末の後を語れなかったのではないか。そう考えると「孔雀」の見えかたはまた違ってくる。

現実世界において、若き日の自分の姿を目の当たりにした富岡は、どのような気持ちを抱き、いかなる態度をとるのであろう。一つの態度が考えられる。一つは自宅に戻り、美少年の写真を『ドリアン・グレイの肖像』のように破り捨ててしまう態度である。これは、内なる美少年を殺して現実世界に回帰すること、おのれの観念世界を消し去り、四歳の娘との生活を回復することである。現在の生を希薄にする心象の美を、『金閣寺』の溝口のように焼いてしまうことである。今一つは、富岡少年の道を現在の富岡が生きる態度である。美少年は孔雀を殺しつづけることで、美であり続けた。美の本質は闇の中で輝きだす。そのような行為者となる道である。

「海と夕焼」(「群像」昭和三〇年一月)で保留されたロマン主義の種子¹⁰がふたたび芽吹き、その開花と結実のしるしを予感した。しかし三島は、逆に今度は「孔雀」の結末でロマン主義的情動を明示することを保留した。富岡に双眼鏡を覗かせないこと、双眼鏡をのぞいた後の富岡の態度を描かないことによつて、いわば最後の勝負を三島は『豊饒の海』に持ち越したのである。

五、夜の夢の国

「孔雀」は、周知のとおり横浜ドリームランドで起きた実際の孔雀惨殺の事件に基づき、三島が事件の経緯を取り入れつつも、事件の動機に三島流の解釈を与えた作品である。二度にわたって孔雀が殺され、鑑定の結果、犬の仕業と断定されたものの、疑問が残る事件であった。疑惑の焦点は事件が犬の仕業であるとしても、そこに人間の関与があったかどうかの点にあった。事件が単に

犬の仕業であるなら、動機を人間の側から説明する必要はなくなる。しかし人間の関与があったと推測するところには、当時の社会状況がくり出した人間の心の闇をこの事件に投影しようという気持ちが働いていた。

この事件の経緯及び作品との比較については久保田裕子の詳細な報告¹¹があるが、あらためてその後を追ってみよう。最初に殺された孔雀を横浜ドリームランドはふたたび補充するが、やがて孔雀は二回目の凶行に遭遇する。「朝日新聞」は野犬¹²をかかげ、「毎日新聞」¹³「読売新聞」¹⁴は犬を連れたものの犯行としている。警察は捜査の結果、「野犬の仕業」¹⁵とした。捜査結果は次のように報じられている。「戸塚署は十九日、神奈川県警鑑識課と協力、埋められていたクジャクの死体全部を掘出し解剖した結果、死体のほとんどに犬のかみ傷があり、十九日朝にも小屋の中に新しいイヌの足跡があったなどから野犬の仕業と断定した。」¹⁶しかし「読売新聞」は「遊園地側は、保安係が深夜二回もあやししい人影を見たこと重視し、イヌのしわざにしても、イヌをけしかけた者があるにちがいないといっている。」¹⁷という別の見方も併せて載せている。

「孔雀」の富岡も、遊園地側の証言と同じく、「人間が犬を使つてやつた」と述べていた。富岡のこの発言は、富岡独自の考えでなく、事件の報道をふまえたものである。三島はおおよそ事件の経緯を踏まえながらも、孔雀殺しの理由については美に対する独自の考えを富岡に陳べさせ、孔雀殺しの犯人については富岡少年が行ったと超現実的な結末を与えている。

事件そのものは、それが犬の仕業だと断定されない前は、その人間的動機が社会とのかかわりで論じられた。これもすでに指摘済みだが「読売新聞」は「クジャク殺し 私はいこうみる」という特集記事を組み、「鳥の中でもとりわけ美しいクジャク、しかも、今回の被害者は前の事件の生き残り一羽と、そのあとに九州や静岡の愛鳥家から贈られてきたものだけに、この事件の裏になにか陰惨なものを感じさせる。人と鳥の違いはあっても、弱い、罪もないものへの無残な殺りくという点では、最近、城西地区で連続して起こった通り魔事件とも通じるものがある」¹⁸と述べたうえで、識者の意見を載せている。

性格心理学を専門とする本間寛は、「オリンピックで世の中がなんとなく浮かれ騒ぎ、はなやいでいるので、こういった世相に対する反感、あるいは美しいものに対するうらやみの感情が、弱いものへの報復」という形であらわれた」「社会的な反感が人間のかわりに動物—なかでもとくに美しいクジャクにぶつけられた、というところに、なにか異常性が感じられる。弱いもの、しかも美しい大量のクジャクに対する攻撃という点で、犯人たちは女性的な性格の気の

弱い、若い男たちだろう。それも、人をうらやんだり、ねたんだりする、ヒステリー性格⁶のもので、放火犯人と似ている」と述べた。また評論家の秋山ちえ子は「暴力団のいやがらせ」「クジャクは人間のみにくいあらゆる犠牲になった」という見解を示し、前上野動物園長の古賀忠道は「世間をアツといわせたいハネ上りの若者の、報酬なき犯行⁷」という見方を示した。

「孔雀」の刑事も、実際に起きた事件の見方どおり、当初は孔雀に偏執的な思いを寄せる異常性格者の仕業ではないかと推測していた。暗い世相、うわついた世相を背景に凶悪残忍な事件がおこったと作品発表当時の人々は考えた。「孔雀」においては刑事の役割が重要である。刑事には名前はない。刑事は事件の結末を正しく目撃する者として登場し、あわせて読者に解釈コードを提供する。当初、刑事は当時の新聞報道が示していたような社会的動向のなかで犯人を異常者と位置づける。その見方に沿って、読者は物語を読み進め、刑事の理解の視線で富岡の様子を理解していく。

富岡に偏執者の狂気を予想した刑事は、富岡家を訪問した当初、富岡の落ち着きとゆとりある物腰に予断を裏切られる。物語後半の刑事は鑑識の判断に納得しており、困操作にもはや熱心ではない。だが富岡の方は、刑事の関心とは別に思いを募らせていく。結末で偏執者の狂気を身に宿した富岡の態度に刑事はもう一度裏切られる。富岡に対する刑事の理解の変容は、「孔雀」を理解するうえで重要である。孔雀事件の真相は、三島作品においては、世相の流れの上にあるのではないと気づかされる。

「美しいものに対するうらやみ」は、三島作品では孔雀に対してではなく、孔雀を孔雀の本質たらしめた犯人に向けられる。三島は「私について離れぬ一個の固定観念」をこの事件に投影させた。三島は変質者や通り魔に孔雀を殺させはしなかった。変質者の内面を三島流に描いたのではなく、三島の分身を物語に登場させた。

昭和三十九年八月二日の「毎日新聞」は横浜ドリームランドの開園を報じている¹⁹。「世界最高の観覧車（フリーケージ・ワンダーホイール）日本最初の遊覧用潜水艦、優雅な大花壇を配したヨーロッパふうの宮廷庭園など楽しさいっぱい、夢いっぱいの横浜ドリームランドが総工費二百億円で完成、二日前十時から一般公開される。これに先立ち、一日午後五時二十分から政、財界の知名士をはじめ文化人、芸能人など約一万人を招き、場内でぎやかな開場式が行われた。²⁰世界最大の国際観光都市」というだけあって、一三二万平方メートルの場内にはお祭り気分があふれ、趣向のこらされた開場式だった。」「横浜市戸塚区俣野、和泉、深谷にまたがる広大な丘陵地帯に出現した夢の国」「暗

くなるとともに場内のイルミネーションが色とりどりの光を放ち始め、夜の夢の国⁸がファンタスティックな姿を現し始めた。」

過去は輝き、現在は死灰に化していると三島は述べたが、その現在とは「孔雀」が書かれた時代の現在でもあった。何もなかったところが開拓され、夜の闇にイルミネーションが輝き、夜の夢の国が現出した。それは確かに昭和三〇年代の高度経済成長期の爛熟が「夜の夢の国」を闇につくり出したものだが、三島はこの情景をおのれの美学の暗喩として用い、「夜の夢の国」に死と美がひそんでいると見た。富岡の孔雀は、「孔雀殺し」を企てた者の顔を見てみたいという富岡の思いの中で、美しい羽根を抜ける。「孔雀殺し」を企てる者が世の中に目立つようになってきた時代が、三島の幻想世界を現実世界に溢れさせることになった。「鼻をつまみながら通りすぎた」²⁰と言う三島にとっての戦後日本の生きがたさが夢想世界を生きることを後押ししたのである。

注

1 「あとがき」(『三熊野語』新潮社 昭和四〇年七月)

2 「小説とは何か」(『波』昭和四三年五月/四五年一月)の「十一」で三島は次のように述べている。「暁の寺」の完成によつて、それまで浮遊してゐた二種の現実はいかて確定せられ、一つの作品世界が完結し閉ぢられると共に、それまでの作品外の現実はずべてこの瞬間に紙屑になつたのである。私は本当のところ、それを紙屑にしたくなかつた。それは私にとつての貴重な現実であり人生であつた筈だ。」

3 注1に同じ

4 「一体自分はいかなる日、いかなる時代のために生れたのか、と私は考へる。私の運命は、私が生きのび、やがて老い、波瀾のない日々の中にたゆみなく仕事をつづけることを命じた。自分の胸の裡には、なほ癒やされぬ浪漫的な魂、白く羽搏くものが時折感じられる。それと同時に、たえず苦しいアイロニーが私の心を囁んでゐる。」(『われら』からの通走―私の文学―『われらの文学5』講談社 昭和四一年三月) このエッセーでは他に「文学はもろんだ切だが、人生は文学ばかりではないといふことを知りはじめたのだ。」という一節もある。また「年頭の迷ひ」(『読売新聞』昭和四二年一月一日)で三島は「私にとつて魅惑的な栄光は、英雄の栄光であつて、文豪の栄光ではない。」「文士か、しからずんば、英雄か」の問題が、「四十歳から四十二、三歳までの間に、絶対的二者択一の形で迫つて来ようなどは、想像もしてゐなかつた。」と述べている。

5 小塾裕二「悲嘆と苦痛―三島由紀夫「憂国」論―」(『上越教育大学研究紀要』二〇〇八年二月)

6 「孔雀」擲筆直後、三島は「憂国」の映画づくりに着手する。

7 富岡少年が登場する超現実的場面は、三島が『小説とは何か』「九」の中で語る『遠野物語』の「炭取の回転」によって「超現実が現実を犯」す場面に匹敵する。「現実の転移の蝶番」として富岡少年は登場する。

8 三島は三好行雄との対談（『三島文学の背景』「国文学」昭和四五年五月臨）において次のように発言している。「自己に不可避性を課したり、必然性を課したりするのは、なかば、作品の結果ですね。ですけれどもそういう結果は、ぼくはむしろ、自分の「運命」として甘受したほうがいいと思います。それを避けたりなんかするよりも、むしろ、自分の望んだことなんですから……。」

9 三島は「花ざかりの森」中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」等に「陥没」という言葉を使用している。

10 「海と夕焼」においては物語の時代設定に神風が吹く蒙古襲来をひそかに背景として置いていることが、三島がロマン主義的要素を温存させたエピソードとして指摘できる。

11 久保田裕子「美の転位—三島由紀夫「孔雀」論—」（『人間文化研究年報』一九九二年三月）この論文中で久保田は「孔雀」結末を次のように解釈している。「少年は初めて夢の外部で孔雀を殺すのである。この結末を美が現実の領域で実現されたというハッピー・エンドにとらえるべきであろうか。だが美が死や滅亡と結び付いているならば、この唐突な幕切れの後に富岡自身の死か、あるいは世界の崩壊がもたらされるかもしれないのだ。このような死を引き換えにしても、美に参与したいという欲望は昭和四十年当時の三島の中にすでに芽生えていたと考えられる。」

12 「朝日新聞」夕刊 昭和三九年一月一八日

13 「毎日新聞」夕刊 昭和三九年一月一八日 続報「毎日新聞」昭和三九年一月一九日

14 「読売新聞」夕刊 昭和三九年一月一八日

15 「朝日新聞」昭和三九年一月二〇日 なお「毎日新聞」昭和三九年一月二〇日は、「十八日朝クジャク小屋の中で発見された犯人のものとみられていた足跡二つもその後の調べで同園の保安係のものと同かった」と述べている。

16 「朝日新聞」昭和三九年一月二〇日

17 「読売新聞」昭和三九年一月二〇日

18 「読売新聞」昭和三九年一月一九日

19 「毎日新聞」昭和三九年八月二日

20 「私の中の二十五年」（『サンケイ新聞』昭和四五年七月七日）

Inundation of Dream

— Research on Yukio Mishima's "*Kujyaku*"—

Yuji ONO *

ABSTRACT

In this research, I considered first, Tomioka "being idle, concerning boring life". Then, I considered concerning the meaning of the surrealistic scene where the Tomioka boy appears with conclusion of the work. After that, it referred concerning the meaning of the past and the future when the storyteller of the "*Kujyaku*" does not talk.

Because Tomioka held down the yearning to the beauty boy in non consciousness, the boring life of Tomioka occurred, that Mishima talks. Simultaneously, the dream world which pushes under being conscious exceeding the threshold, Mishima talked that it starts overflowing in the actual world. That meaning is important.

The wall with dream and actuality is gone, the wall with the fictitious world and the actual world, dream and the fictitious world occurring in the actual world it had shown the conclusion of the "*Kujyaku*". The thinking which denies boring life produced the inundation of dream of the "*Kujyaku*".